遺産少ない方が「争続」

ハリスにリベラル期待
インド株は儲かるのか

大谷翔平の後半戦
阿部亮平とアート

AERA

昭和63年6月10日第3種郵便物認可 2024年8月5日発行
毎週月曜日発行（7月29日発売）通巻2041号

'24.8.5 No.35
アエラ 定価470円

フォークデュオ
ゆず

【巻頭特集】
相続「親任せ」は危ない

母にとって旅行が生きる力に

老親との旅行をあきらめない

コロナ禍で数年間、遠出や旅行を控えているうちに、親がすっかり老け込んだ、という人もいるだろう。でも、要介護状態だからといってあきらめるべからず。施設のバリアフリー化も進み、頼れる助っ人もいる。

〈コロナも落ち着いたし、ママを旅行に連れていかない？　最後の旅行になるかもよ〉

都内に暮らす女性（55）のもとに、姉（58）からLINEが届いた。姉の職場で「老親のために」と、旅行休みを取る同僚が続いたのだという。母親は当時90歳（要支援2）。9年前に脳梗塞を起こして右半身にまひが残ったが、都内の一軒家に一人で暮らしている。

母親に希望を聞いて行き先を沖縄に決めると、「沖縄なら」と娘二人も乗ってきて、3世代5人で2泊3日の沖縄旅行に。

「ホテルのビュッフェで私たちが母の食べたいものをとってあげると、『おいし、おいし』と喜んでくれました」（女性）

なるべく歩かずにすむようにと、道中はタクシーを利用した。

「ドライバーさんは、途中、トイレに行きたそうな母の様子に気づき、車を寄せて近くの公園に連れていってくれたり、夕陽がキレイなタイミングでビーチを案内してくれたりして感謝です。海をバックに写真が撮れて記念にもなりました」（同）

入浴介助受けて温泉に

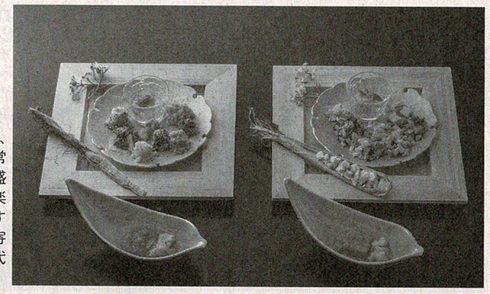
帰りの那覇空港。孫たちから「また行こうね」と声をかけられると、「行こう！　行こう！」と母は即答。そのあとに、「まだ、生きてていいの？」

本音がこぼれた。

「母は心のどこかで、生きていることで周囲に迷惑をかけていると感じていたのだと思います。でも、私が『うん』と返すと満面の笑みで『頑張りまぁす』と言ってくれた。その時、じんわりと温かい気持ちになりました。旅行は母にとって生きる力になったのだと思います」（女性）

昨年5月に新型コロナウイルス感染症が「5類」となり、厳しい感染対策が解除された。親を旅行に連れていきたいと思っても、この数年の間に親に身体介助が必要となったり、認知症が進んだりして、不安を感じている人は少なくない。そんなときに心強い味方がいる。「トラベルヘルパー」、外出支援専門員だ。

東京都町田市の高齢者施設に入居する102歳の女性は、5月に70代と80代の娘と神奈川の湯河原温泉に1泊旅行をした。



左がミキサー食、右は刻み食。通常食と同じように盛りつけ、目でも楽しめるよう演出する。旅行弱者に寄り添う姿勢は先代から続く

介護福祉士の資格を持つ涌井かおりさん（茨城県在住）も同行。涌井さんは普段は有料老人ホームで働いているが、登録している介護旅行サービス「あ・える倶楽部」からの要請で、トラベルヘルパーとして同行した。

「娘さまからのご要望は、親御さんを源泉かけ流しのお風呂に入れてあげたいということと、施設ではなかなか食べられないお刺し身などを食べさせてあげたい、の二つでした」（涌井さん）

女性は宿につくなり、「温泉に入りたいわぁ～」と声を上げた。涌井さんの入浴介助を受けながら温泉に入り、「あぁ気持ちがいい」と言った。

同行の家族も旅を満喫

トラベルヘルパーは依頼者の要望に沿って、必要な介助を行う。今回、涌井さんは食事や歩行、移動の介助、見守りなどを中心に業務を行った。夜間は排泄（はいせつ）介助をするため同じ部屋に泊まった。娘たちは安心して温泉も食事も楽しんでいたという。

老親との旅での心配は、転倒や移動の問題だ。公共交通機関や宿泊施設でハード面のバリアフリー化が進んできたとはいえ、何が障害になるのか、行ってみなければわからない面も多い。

「バリアフリー施設」とうたっていても、実際は一部であり、肝心の客室のトイレなどに段差があることも。そんなときにトラベルヘルパーが頼りになる。

跡見学園女子大学兼任講師（観光温泉学・観光取材学）の山崎まゆみさんは、「現場での彼女らの対応力にいつも感心しています」と話す。たとえば大浴場。フロアに滑り止めマットがないことがわかると瞬時にバスタオルを下に敷くなど、福祉用具がない場面でもそこにあるもので安全・安心に介助する。

「トラベルヘルパーに同行してもらうことで、介護の不安も軽減され、安全も担保されますので、同行のご家族も旅を満喫できます。高齢者は骨折を機に寝たきりになってしまうリスクもありますから、冷や汗をかかずにすみます」と語る。

NPO法人日本トラベルヘルパー協会の篠塚恭一会長は言う。

「介護が社会化され、介護者も高齢化してきた。お金で買える親孝行があるならそれも良しと、考えるようになってきていると思います」

旅先で入浴介助だけ

ただ決して安くはない。トラベルヘルパー利用に介護保険は適用されず、すべて自己負担だ。前述した102歳のケースでは、利用料金は1日の基本料（8時間）3万9600円×2日分、延長料金（2時間半延長で、1万5465円）、同室に宿泊した料金（5500円）、夜間の介助料金（6600円）が加算され、そのほかトラベルヘルパーの宿泊費や移動交通費、保険料金などが加わる。

「旅先で入浴介助だけ、という依頼もできます。東伊豆や箱根などの観光地ではトラベルヘルパーが地元の人たちと連携し、活動しています」（篠塚会長）

施設などハード面だけでなく、ソフト面のバリアフリー化に取り組む宿も増えてきている。

旅行弱者に寄り添う旅館として人気の「ホテル松本楼」（群馬・伊香保）は車いすで脱衣場まで入れるバリアフリー貸切風呂や、露天風呂付きバリアフリールームなど充実。食事にも配慮がある。嚥下（えんげ）機能が落ちた人には、ミキサー食や刻み食を提供。同行者と同じ器で出す。3年前には食の細い高齢者向けに「ハーフ懐石」も開始した。介護旅で必要になる車いす、高座いす失禁対策の防水シーツなどのレンタル品も用意している。

従業員は視覚障害者への料理の説明など、基本的な対応は行うが、入浴介助など本格的なものは外部の利用を勧めている。金額は要介護度によるが、1時間2500円から（別途交通費）。

女将（おかみ）の松本由起さんは話す。

「介護施設で暮らしている方にとって、温泉は貴重な体験。お子さんが『最後の旅行になるかもしれない』と親御さんをお連れになるケースがとても多いです。先日も旅行にいらっしゃった後に『あの後に亡くなりました』と遺影を持ってお見えになった方がいました。ご家族が手をつないでいたり、お孫さんがおばあちゃんの手をとって階段を1段ずつ下りていたりしているのを見て、ほほえましいなと。そのために旅館があるのではと思うほどです」

少しのサポートあれば

前出の山崎さんは言う。

「高齢者の旅行を計画したら最初にすべきは、親の体の状態を把握することです。その上で親が安全に泊まれる宿であるかを電話で確認しましょう。入浴介助が必要なら、サービスの有無を尋ねてください。そうした電話での対応で、宿のスタンスがわかります。そっけなく終わるか、親身になってくれるかで、滞在中に寄り添ってくれるかがわかります。少しでも不安を抱いたら、やめておきましょう。仮に、受け入れ慣れている宿であれば、宿の方から滞在中の提案もしてくれますよ」

ポイントは「ありのままに話すこと」だという。要介護度を低めに言うのは避けて、親の体の状態（歩行や排泄などADL＝日常生活動作のレベル）を正しく伝える。さらに自分の介助力も添えると良いだろう。

旅行先に「旅行介助士®」を派遣する「日本介護旅行サポーターズ協会」（通称：リョコサポ）の代表理事で、介護事業に特化したコンサルティングを行う糠谷和弘さんはこう話す。

「高齢者に優しい宿を見極めるのは非常に難しいし、宿側に介助を期待するのも厳しい。介護福祉士が宿に常駐しているというのも聞いたことがない。しかしその一方で、実際にはちょっとしたサポートがあれば旅行に行ける人って、たくさんいるんです。そういう人は、旅行介助士同行による終日介助ではなく、入浴、食事、移動、乗降などの場面でスポットでの介助を依頼することでコストも抑えられます」

別れてからでは遅すぎる。さぁ、親を旅に連れ出そう。

記者・介護福祉士　大崎百紀

（上）伊豆・天城湯ケ島温泉を楽しむ男性。トラベルヘルパーが支える／（右）トラベルヘルパーが寄り添うことで娘も父（当時93歳）との旅を楽しめる／（下）北海道への旅行も実現

photo　SPIあ・える倶楽部提供（上3枚）　ホテル松本楼提供（右下）